

子宮体癌に対するアロマターゼ遺伝子をターゲットとした遺伝子治療への戦略

著者	瀬川 智也
著者別表示	Segawa Tomoya
雑誌名	平成15(2003)年度 科学研究費補助金 若手研究(B) 研究概要
巻	2002 2003
ページ	1p.
発行年	2016-04-21
URL	http://doi.org/10.24517/00061167

[◀ Back to previous page](#)

子宮体癌に対するアロマトラーゼ遺伝子をターゲットとした遺伝子治療への戦略

Research Project

Project/Area Number	14770842
Research Category	Grant-in-Aid for Young Scientists (B)
Allocation Type	Single-year Grants
Research Field	Obstetrics and gynecology
Research Institution	Kanazawa University
Principal Investigator	瀬川 智也 金沢大, 医学部附属病院, 助手 (40301197)
Project Period (FY)	2002 - 2003
Project Status	Completed (Fiscal Year 2003)
Budget Amount *help	¥3,900,000 (Direct Cost: ¥3,900,000) Fiscal Year 2003: ¥1,500,000 (Direct Cost: ¥1,500,000) Fiscal Year 2002: ¥2,400,000 (Direct Cost: ¥2,400,000)

All

Keywords 子宮体癌 / アロマトラーゼ**Research Abstract**

【目的】子宮体癌はエストロゲン作用の亢進がリスクファクターのひとつであり、乳癌同様に組織中のエストロゲン合成酵素(アロマトラーゼ)の発現によるバラクライン・オートクライン機構を介する癌細胞増殖促進の可能性が考えられる。我々は子宮体癌におけるアロマトラーゼ発現による癌の増殖・進展の機序の解明を目的とした。

【方法】患者の同意を得て採取した子宮体癌組織85例について抗アロマトラーゼ抗体を用いて免疫染色を行い、上皮・間質・筋層に分類して発現の有無を検討した。臨床病理学的因子は進行期・筋層浸潤・組織grade・年齢等に関して統計解析を行い、Kaplan-Meier法による生存分析も行った。一部症例についてPNAプローブを用いたISH法およびlight cyclorを用いた定量的RT-PCR法にてアロマトラーゼmRNAの発現を定量化した。また子宮体癌由来細胞株の培養を行いアロマトラーゼ阻害剤を添加してその増殖抑制効果の検討を行った。

【成績】臨床検体での検討では、アロマトラーゼは上皮52%、間質64%、筋層41%と高率に発現を認めた。上皮での発現は、筋層浸潤あり46%、なし73%、grade1 58%、grad2,3 32%とそれぞれ予後良好群に多く認められた(p=0.05,p=0.03)。筋層で発現する場合、予後不良であった(Wilcoxon p=0.05)。アロマトラーゼ蛋白とmRNAの発現は良く相関した。Ishikawa細胞株を用いたWST-1 assayでは、アロマトラーゼ阻害剤であるTZAの添加により濃度依存的に細胞増殖抑制効果を認めた。

【結論】アロマトラーゼ発現は子宮体癌細胞の増殖に関与し、特に筋層での発現が予後と相関することが示された。筋層のアロマトラーゼ発現は腫瘍の筋層浸潤を促進する可能性が示唆された。

Report (1 results)

2002 Annual Research Report

URL: <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-14770842/>

Published: 2002-03-31 Modified: 2016-04-21